

中央ユーラシアの複合弓：  
匈奴勃興以前の草原地帯東部を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/23767">http://hdl.handle.net/2297/23767</a>

## 中央ユーラシアの複合弓

### —匈奴勃興以前の草原地帯東部を中心として—

高濱 秀 (金沢大学)

スキタイなどの初期遊牧民が戦いに用いた武器のうち、弓が重要な位置を占めていたことは改めて述べるまでもない。特に馬に乗って弓を射る騎射は、遊牧民の最も得意とした戦術と考えられている。たとえばよく知られたパーティアン・ショットというものも、実態はどういうものであったにせよ、遊牧民が騎射にあたって用いた戦術の一つである。

1本の木から作られた弓は、丸木弓と呼ばれ、各種の部分を組み合わせて作ったものは複合弓 (compound bow)、さらには骨や角など数種の材料を木と組み合わせたものは、合成弓 (composite bow) と呼ばれているが、初期遊牧民の使用した弓は、複合弓あるいは合成弓と考えられている。

本稿ではまずアルタイ・トゥバ地方より西方の草原地帯で、初期遊牧民の使用した弓について述べる。それから東シベリアとモンゴル、そして最近例数が増えてきた中国北方における資料をまとめて述べ、匈奴の勃興以前に使われていた弓を中心に考察したい。

#### 1. アルタイ以西

スキタイ・サルマタイ時代のユーラシア草原地帯の弓については、1960年代に A. M. ハザノフが研究を進め、その大筋を示している。

ハザノフによると (Khazanov 1966)、スキタイの弓は、幾つかの木片を組み合わせたもので、中央の握り部分と両端は曲がらず、肩部だけがしなうように作られていた。両端に角製の部品を使った可能性もあるという。貴金属製品などの図から見ると、両端が丸く曲がった形になっているのが特徴である (図1)。長さは0.6 mから0.8 mであった。このような弓はギリシアからシベリアまで広い地域に普及し、西暦紀元の始まりの頃、あるいは更に後まで使用され続けた。

しかし西暦紀元の始まる少し前から新しい種類の弓が発明され、ユーラシア草原地帯およびイラン、そしてヨーロッパにまで広まることになった (図2)。匈奴・フンの弓として知られるものである。それは、数片の木を合わせて基幹部を作り、角、動物の腱、骨製板などで補強

する。基本的な型式は、7つの骨製の板あるいは部品を使用するものである。

すなわち弓の両端には、一面が平たく他面が膨れた形の弓弭2枚を合わせて付ける。これには弦を掛けるための切込みがあり、2組のうち1組の方が他方より長い。弦は普段長い方の切込みに固定しておき、使用する前に他方に掛ける。そのため長い方は端部が方形であり、短い方は弦を掛けるのに便利のように円くなっていることがあるという。弓弭に長短があることにより、弓を引いたときの形は非対称形になる。中央の握り部分には、両側に2枚の台形の板、後側に中央が狭く上下両端が広くなった板を付ける。

この型式の弓はスキタイの弓と類似するが、中央部と両端がたわまず、肩部が大きな弾力性をもつように更に工夫されている。長さはスキタイの弓より長く、1.2 m ~ 1.6 mあり、更に強力なものとなっている。

この型式の早い例として、ハザノフは匈奴のノヨン・オール (ノイン・ウラ)、イリモヴァヤ・パチ、そしてバイカル湖西側のツェパン出土品などを挙げる。また中央アジア、ヴォルガ川下流域などのサルマタイの領域、そしてイギリスにまで及ぶ広範囲に及ぶ多数の出土例を示し、この型式の弓がフン式と呼ばれてはいるが、匈奴・フンだけに属するものではないと主張する。またスキタイ式からフン式への交替について、これは匈奴がフン式弓を発明して、その影響が及んだというよりも、両型式は型的にはほぼ連続するもので、草原地帯東部のほうが変化が早かったのだと考えている。

#### スキタイ

黒海沿岸については E. V. チェルネンコの著作により紹介する (Chernenko 1981:7-21)。スキタイの弓の残存例は殆どないらしい。1967年にケルチの南のトリ・ブラタ2号墳で稀な例が発見された (図3)。太さ約2 cm、長さ64.6 cmで、3本の木からなり、幅1.3 ~ 1.5 cmの樹皮が巻きつけられている。これは弦を掛けずに墓に置かれていたらしい。またオルビアの墓地で、長さ10 cmの弓の模型が、子供の墓である49号墓から発見された (図4)。使用状態の弓の形で、両端の丸まった特

徹的な形を示している。

弓の一部と考えられる骨片あるいは角片が発見された例は、いくつかある。ヴォルコフツィの2号墳では、被葬者の肩の左で、木製弓の端に付けられたと推測される骨製の部分品が発見されている(図5-1)。類似したものは、プロヴァルキ503号墳(図5-2)、ヴォルスクラ川流域のキリコフカ13号墳、旧ロメンスキー郡(図5-3)からも発見されている。また端部ではないが、弓の一部であったと考えられる骨製品が、プトキ1号墳や(図5-4)、ヘルソンのノヴォアレクセエフカ17号墳(図5-5)などで発見されている。ジュダノフ7号墳でも長さ10.5cmの骨製品がゴリュトスと共に発見されている(図5-6)。これにはところどころ網状の刻線があり、木製の弓本体にしっかりと貼り付けるためのものだという。また弓の部品と考えられる長方形の骨製品がベリスコエ・ゴロディシチェでも発見されている(図5-7)。

しかしスキタイの弓を示す最も数の多い資料は貴金属製品などに見られる画像資料ということになる。テルノフカ出土の石人に刻まれたゴリュトスの図では、弓の端部にグリフィンの頭が付いている(図6)。このように弓の先にグリフィンの頭をつける例は、ほかにもサフノフカの「ディアデム」に表わされた例や、タタリアのオマル出土の飾金具にも見られる。ここからチェルネンコは、スキタイの墓から発見される一連の鳥頭形の骨製品を、弓の端部に付ける部品と推定している(図7)。ただこの種の鳥頭形骨製品の用途については、研究者の間に様々な意見があり、筆者自身も、その幾つかは馬具の辻金具の可能性があると考える(高浜1999)。

スキタイの弓が短かったことは、多くの研究者によって認められている。メリューコヴァによると、ゴリュトスの長さから考えて、60cmをわずかに越す程度だという。テレノシュキン、イリインスカヤも最長で70cmと考えている。しかしメリューコヴァは、一方では、1mに達する長い弓もあったと考えており、これはチェルネンコも、矢の長さを根拠として賛成している。

#### ウラル地方

スキタイに隣接するサルマタイの領域でも弓の発見は稀であるが、南ウラルのメチェトサイ7号墳7号墓で発見された例があり、これは長さ75～80cmであった(Chernenko 1981:17)。保存状態は悪く、1本の木で作ったのか複数をまとめたのかもはっきりしない。発掘者のスミルノフは弧形の丸木弓と考えている。またオルスク

近くのノヴォクマク古墳群13号墳1号墓でも弓の一部と考えられる木片が3片発見されている。

サウロマタイの古墳であるブラゴスラヴェンスキーから弓形の青銅製金具が出土している(図8)(Smirnov 1964, Fig. 37-1zh)。これは前4世紀の古墳とされる。

フィリポフカ古墳から、騎馬人物を表した高さ9cmの骨製彫刻が出土している(The Metropolitan Museum of Art, Yale University Press 2000: No. 111)(図9)。この古墳は近年発掘され、貴金属製品を主とする様々な遺物が発見されて話題を呼んだ。初期サルマタイ時代、前4世紀と考えられている。騎馬人物は腰の右側に剣を着け、左側に弓を入れたゴリュトスを吊している。

シベリアで収集されたと考えられているピョートル大帝のシベリア・コレクションのなかには、馬に乗り、弓を引いて今にも射ようとしている騎士像がある(図10)。服装などから考えても、やはりスキタイなどの初期遊牧民時代のものであろう。弓は小型の「スキタイ式」のものである。

#### 山地アルタイ

山地アルタイのこの時期の文化は、パジリク文化である。この文化の弓に関してよく知られた資料は、パジリク5号墳から出土した壁掛けであろう(図11)。女神と考えられる椅子に腰かけた女性の前に、騎士が表されており、騎士は、腰に弓の入ったゴリュトスを下げている。スキタイの図像資料から知られるのと同種のものである。また近年の幾つかの発掘により、弓の残欠や弓袋などが発見されている。

山地アルタイ、ウコック高原のヴェルフカルジン2号墓地では、弓袋あるいはゴリュトスが発見されて、復元された(Polos' mak 2001: 174-181)(図12)。ポロシマクによるとフェルト製の帯に下げるもので、上に帽子状のカバーを掛け、木製の芯を縦に入れる。木製の弓弭と考えられるものが3号墓の弓袋の「帽子」の中から、角製のものが弓袋の下部から発見された(図13)。それらには弦を掛けるための突起があり、外側に弦のための溝が付けられている。

ポロシマクは、弓袋の大きさから弓の長さを推定した。ヴェルフカルジン2号墓地3号墳の弓の長さは110.6cm、1号墳出土のものは92.1cm、アク・アラハ1号墓地1号墳出土のものは90cmであったという。

ヴェルフカルジン出土の弓弭に類似したものは、西シベリア、バラバ地方のヴェングロヴォ7号墓地、2号墳

でも発見されている (Polos' mak 1987: 77, Ris. 73-2) (図 14)。またミヌシンスクのタシュティク文化においても、類似した端部を持つ弓のミニアチュアが、後 1～2 世紀のシルスキー・チャアタスから出土しているという。

アルタイのウランドリク古墳群では、子供の墓で発見されたミニアチュアを除くと、42 基の古墳において 7 基の墓で発見されている (Kubarev 1987:69)。すべて破片ではあるが、木製の幾つかの部分から作られた複合弓であることは分かる。破片には中央に溝があり、接着する面に斜めの刻みが入っている。幅 1 cm ほどの樹皮で巻かれていた。弓の長さは発掘状況から 1 例では 105～110 cm、2 例では 120 cm と推定されているが、これは弦を外した状態であり、弦を張った状態では、80～90 cm であっただろうという。

ユスティド古墳群では 44 基のうち 6 基の墓で弓が発見されている (Kubarev 1991:83)。ウランドリクとほぼ同じで、木製の幾つかの部分から作られた複合弓であり、その破片に溝があり、接着する面に斜めの刻みが入っていることも同じである。

バルブルガズ古墳群では、3 基の男性の墓で木製の複合弓の破片が出土した (Kubarev 1992:69-71)。断面が楕円形か方形で、接着する面に、斜めの刻み目が付けられている。いずれの場合も矢筒あるいはゴリュトスの近くで発見された。長さは復元できなかったが、105～120 cm を超えるものではないという。

V. D. クーバレフは、彼の調査したアルタイの遊牧民の弓は、スキタイに見られる小型のものではなく、また木だけを使用した弓であることを指摘している。鹿石に表わされたような「スキタイ」的な弓と、土着の長めの弧形のもの 2 種があったのではないかと考えている。

#### トゥバ

トゥバからは小型の弓の模型が発見されている (Moshkova 1992, s. 187, Tabl. 75-43) (図 15)。帯に下げた弓袋あるいはゴリュトスに納めたものであろう。しかしこの地方で発見される鏃からは、大型の弓もあったことが推測されている。

モンゴルのウランゴム墓地は、モンゴルの西北部、オヴス・アイマクにある (Novgorodova et al 1982)。この墓地では匈奴墓も発掘されているが、大部分は初期遊牧民時代の墓である。その文化はモンゴルというよりは、すぐ西に接するアルタイやトゥバの初期遊牧民文化と似

たものといえるであろう。ここの初期遊牧民文化の 46 基の墓のうち 4 基から弓の残欠が出土している。

23 号墓では 1 号人骨 (男) の右側で発見された。頭蓋骨のそばに、45cm ほどの木製矢柄の付いた鏃が発見されており、弓と矢はまとめて置かれたらしい。33 号墓では、弓は 4 号人骨 (男) に付属して発見されたが、保存の良かったのは、木製の基部だけであった。36 号墓では、子供である 1 号人骨の副葬品として弓の残欠が発見されている。2 体の男性人骨が出土した 53 号墓からは、2 号人骨の胸のあたりから弓の残欠が発見された。4 点の弓はいずれも木製であり、他の材質で作られた弓弭のような部品は発見されていない。

#### ミヌシンスク

ミヌシンスク地方においても、弓の形を模した金具が幾つか発見されている (Devlet 1966) (図 16)。ギリシア文字のシグマ形  $\Sigma$  を呈し、スキタイの弓と同種のものであることが窺われる。弓袋に入れられているものもあり、スキタイと同じく帯から下げた携帯用の小型の弓であることが分かる。

## 2. ザバイカリエとモンゴル

ザバイカリエおよびモンゴル地域の弓を考える際に、まず挙げられるのは、鹿石に表された弓である (Volkov 2002) (図 17, 18)。鹿石とは、モンゴルの青銅器時代に作られたもので、高さが 3 m から 1 m 程度の石柱状をなしている。一種独特の鹿の紋様が表されていることから、その名がある。しかし刻まれているのは鹿だけではなく、帯やそれに吊るされた短剣、戦斧なども表されており、鹿石は戦士の姿を表現したものだと考えられている。鹿の姿がなく、頭部と胴部を区画する首飾状の点線や、耳環や帯などが刻まれるものも、鹿石の一種と考えられる。

分布の主な場所はモンゴルで、おそらく 600 個ほどに達するが、そのほかザバイカリエ、アルタイ、中国新疆ウイグル自治区、ウラル、そして北カフカス、黒海北岸、ブルガリヤなどでも発見されている。

鹿石に刻まれた武器のなかには、弓もしばしば現れる。矢をつがえた弓や、帯から下げられた袋入りの弓などである。弓はシグマ形を呈しており、スキタイがゴリュトスに納めて帯から下げたものに近い形をしている。鹿石に表現された弓がどのようなものであったのか、それ以上のことは分からないが、スキタイのものに近い小型の

複合弓であったことが推定される。鹿石に表された武器には短剣もあるが、それらは中国北辺の西周時代の短剣とよく似ている。また商代相当期の獣頭短剣に似たものもある。そこから、鹿石は中国の商代後期から西周時代に並行すると考えられる。

モンゴルの青銅器時代の遺構には、板石墓もある。これは板状の石を垂直に立てるようにして、方形の墓域を囲うものである。板石墓を築造するために鹿石を再利用した例もあり、板石墓文化は、鹿石と同時期あるいは少し遅れる時期のものと考えられる。板石墓からは、合成弓の弓弭の部分が発掘されている。ザバイカリエとモンゴルで、この種の弓弭の用いられた板石墓文化の時期は、ツビクタロフによれば、前8～6世紀頃である(Tsybiktarov1998: Ris.96)。

バイカル湖の西側のタイガ地帯で、ツェパン川がアンガラ川に合流する所の近くで発見された墓から、角製の弓弭が2対出土している(Okladnikov 1940) (図19)。これは1940年にA.P. オクラドニコフによって紹介された。板石により囲まれた2.7×0.8mのほぼ楕円形の中に墓壇があり、男性の人骨が1体発見された。弓弭の1対は人骨の左肩のあたりから、他の1対は同じく人骨の左側の足の近くから出土した。両者の距離は1.2mであったという。骨製の銛、青銅製の骨製の鏃、剣の先と推定される青銅板、青銅製針などが他に発見されている。対になった弓弭は弦のための切込みのある端の方ではぴったりと接しているが、他の端の方は弓の本体に取り付けるために幾分離れているという。1対は他の1対よりも、端部が丸まった形をしている。

バイカル湖のオルホン島に所在するボドン17号墓および67号墓から、弓弭が2点ずつ出土している(Dashibalov 1995: Ris.3)。ボドン17号墓のものは、被葬者の腰のあたりと、腕の附近から発見された(図20-1)。67号墓においては、被葬者の大部分の骨は失われており、弓弭も墓壇から発見されたとしか報告されていない(図20-2)。

バイカル湖の東側であるザバイカリエの弓弭が、ツビクタロフによって紹介されている(Tsybiktarov 1998: Ris.68)。角あるいは骨製で、わずかに曲がっており、長さは15cmに満たないほどである。広がって丸くなった端部に、弦を掛けるための切込みがある。マンハイから3点(図21-1, 3, 5)、マンダル・ゴビ5号墓から1点(図21-2)、ナリイン・ホンドイから1点(図21-4)出土し

ている。

モンゴルのドンドゴビから、2人の騎士の戦闘図をあらわした鏡が発見されている(Erdenebaatar 2004, Fig.8-4A) (図22)。一方の騎士は短めの弓に矢を番えており、腰にはゴリュトスのようなものが見える。発見の状況が不明なのが残念である。

モンゴルでは、フブスグル・アイマク、オラーン・オーシングI遺跡において、板石墓から弓弭が発見されている。(Takahama et al 2006: Pl.8) (図23)。被葬者の大腿部あたりから、弓の端部を足先のほうに向けて2点1組で出土した。そのほか1点が墓壇の上から発見されており、元来上下2組が1張の弓に付けられていた可能性が高い。この墓はおそらく小動物によって攪乱されたと考えられ、人骨も基本的に原位置で発見されたが、下顎骨など、発見されなかった骨もあった。2点1組で発見された弓弭は原位置を保っていたと思われ、弓の下端部にあたる。原位置で発見されなかった上端の弓弭は、被葬者の頭部近くにあったことになる。墓壇の大きさから考えて、弓の長さは1m以下と考えてよい。

ほかにモンゴルでは、歴史研究所所蔵のものや、ドンドゴビ出土の弓弭が知られている(Erdenebaatar 2002: 247) (図24, 25)。

ザバイカリエおよびモンゴルでは、匈奴のものと考えられる墓地が数多く知られている。北モンゴルのノヨン・オール(ノイン・ウラ)もその一つであるが、チェリヨムホヴァヤ・パチやイリモヴァヤ・パチなど、前漢時代に相当する時期の墓地もある。

P. B. コノヴァロフによると、チェリヨムホヴァヤ・パチやイリモヴァヤ・パチで発掘された匈奴の弓には、10点の骨製板が付けられているという(Kononov 1976: 178-179, Tabl.3) (図22)。すなわち両端にあわせて4点、中央に2点、その中間に4点で、すべて対をなして取り付けられる。弓弭となる両端の板は長さ40cm近くに達し、細く、幾分曲がった形で、断面は半円形をなす。中間のものは長さは22-25cm以下で、断面は半円形、細長く両端が広がり平らになる。これらを並べると、弓の長さは155cmから160cmに達し、弦を張るとほぼ150cmになるという。

### 3. 中国北辺

中国北辺においても、切込みのある骨製弓弭は、春秋時代から存在する。以前は弓の部分であることが認識さ

れていなかったが、洲傑などの研究により、弓弭であることが知られるようになってきた。後漢時代の鮮卑のものとされる墓地からの出土が多く、内田宏美などにより研究がすすめられている。また最近、漢代長安の未央宮出土の「骨簃」と呼ばれていたものが弓弭であることが、于志勇によって明らかにされた（于志勇 2007）。

ここでは主として春秋戦国時代の例を紹介する。

まず画像資料を挙げると、夏家店上層文化に属する南山根 102 号墓出土の骨製の板がある（中国社会科学院考古研究所東北工作隊 1981）（図 27）。これは馬車や鹿を射る人物像などを刻んだものであるが、人物は小型の弓を持っている。板の長さは 34cm で、右ひじの下で発見され、ひじの装飾品と考えられている。

北京軍都山玉皇廟では、3 基の墓から合わせて 5 点の弓弭が出土した（北京市文物研究所 2007: 1345, 図 760-1, 2, 3, 図版四四四-3）（図 28）。形はいずれも断面が半円形で、一端に切込みの入るものである。95 号墓から残存長 11.1 cm、幅 0.8 cm、厚さ 0.22 cm のものが一点出土している。これは被葬者の左股骨の内側から発見された。膝のあたりからは青銅鏃 6 本と骨鏃 15 本が出土している。54 号墓からは被葬者の右股骨の内側から弓弭が 2 点出土した。近くから骨鏃も 5 点出土している。弓弭の 1 点は完全で長さ 12.5 cm、幅 1.2 cm、厚さ 0.2 cm である。74 号墓からも、被葬者の右鎖骨の上から 2 点出土した。そのうち 1 点は完全で長さ 7.8 cm、幅 1.1 cm、厚さ 0.2 cm であった。95 号墓と 54 号墓は春秋中期、74 号墓は春秋後期の前段と推定されている。54 号墓と 74 号墓ではいずれも 2 点が 1 組で出土しているが、どちらも弓の端部の一方分だけしか発見されていないことになる。

楊建華によると、河北省白廟墓地においても弓弭が出土しているという（楊建華 2002: 157-158）。この墓地は玉皇廟と似た燕山地域の遊牧民文化に属しているが、発見されたのは、57 号墓、84 号墓、88 号墓、99 号墓の 4 基である。57 号墓では右腿骨の横にあった。84 号墓では、2 点の弓弭が、1 点は左大腿骨の外側、1 点は頭骨の左上方にあり、その間に点々と骨片が並んでいた。弓背の両側に付けられたものだという。88 号墓では、弓がほぼ完全な形で出土した。4 点の弓弭があり、弓の端それぞれに 2 点の弓弭が見出された。1 組は右肢骨関節の内側に、別の 1 組は股骨関節の外側にあった。その両端の弓弭の間には弓背を包むごく薄く扁平なものが連

なっていて、長さが 99 cm であったという。99 号墓では 1 点の弓弭が右大腿骨の内側から出土したという。

河北省懷来県北辛堡では、1 号墓から 3 組発見されている（河北省文化局文物工作隊 1966）（図 29）。1 組は墓主の棺の中から出土したもので、長 24cm、幅 1.6 cm、2 点を合わせた厚み 0.5 cm である。2 組は墓主の棺の上に置かれた殉葬者に伴って発見された。この墓からは中国の青銅器も出土しているが、北方的な短剣なども発見されている。年代は春秋時代末から戦国時代初め頃と考えられる。

内蒙古林西県西溝子西区墓葬では、弓弭が 2 点、2 基の墓から出土しているが、ある程度の詳細が分かるのは、3 号墓出土のものである（吉林大学辺境考古中心、内蒙古文物考古研究所 2004: 8, 13, 図九-12）（図 30）。これは長さが 11.9 cm であるが、今まで紹介したものとは異なった形態をしている。すなわち全体にわたって一定の幅と厚みを持つのではなく、切り込みのある部分は普通と同じ形であるが、他端では幅と厚みが逆転するというもので、2 枚のそれぞれ平らな面を合わせて一組にする普通の形ではない。弓本体への取り付け方も、他の例とは異なるはずである。この西溝子西区 3 号墓は、8 個体分の人骨が墓口から墓底まで詰まっていた墓で、多くの副葬品が攪乱を受けたと考えられている。しかしこの骨製弓弭は骨鏃とほぼ同じ場所から出土しているらしい。年代は春秋後期から戦国前期頃と考えられている。

内蒙古涼城県崞県窯子墓地は遊牧民の墓地であるが、その 2 号墓、6 号墓、21 号墓からそれぞれ 2 点ずつ、計 6 点出土している（内蒙古文物考古研究所 1989: 71, 図一四-13, 図版一一-9）（図 31）。2 号墓出土のものは現長 24.3 cm、幅 1.6 cm、21 号墓出土のものは現長 13 cm、幅 1.7 cm である。6 号墓のものは、被葬者（男性）の頭の左側、墓壙の壁に沿って骨鏃と共に発見されている。21 号墓では墓壙の南側にある二層台の上で、被葬者の左肩の少し下および、左足の横に 1 点ずつ発見された。その上方の埋め土の中からは骨鏃が 1 点出土したという。発掘報告では、2 号墓は春秋後期あるいはその少し前、6 号墓と 21 号墓は戦国前期と推定している。

内蒙古自治区呼和浩特市和林格爾県新店子墓地からは、長条形の骨製弓弭が出土している（内蒙古文物考古研究所 2009: 11, 図七-4, 図一〇-3）（図 32）。これは長さが 6.1 cm で、厚くなった一端に溝が作られ、他の端は薄くなる。これは林西西溝子のものに似て、1 点で

使用される形である。ここは遊牧民の墓地であるが、その出土品は、他の内蒙古中南部の墓とは異なっており、飾金具や帯扣などにも、燕山地域との共通点が指摘できる。年代は春秋時代後期と考えられている。

内蒙古包頭市西園墓地においては、骨製弓弭が2点出土している（内蒙古文物考古研究所、包頭市文物管理处 1991: 21, 図九-2）（図 33）。4号墓の被葬者の足の附近から発見されたい。長さは14 cm、幅0.8 cm、厚さ0.2 cmで、端部に近く切込みがある。

甘肅省金昌市蛤蟆墩墓地は沙井文化の墓地である（甘肅省文物考古研究所 1990: 224, 図一八-11）。その15号墓から2対の弓弭が足の下腿部の近くから重なって出土している。これは1張の弓に付けられたものではない。また18号墓では、被葬者の腰より少し下の方から1対の弓弭が発見されている（図 34）。これは骨鏃を装着した1本の矢のすぐ近くであった。残長11 cm、幅1.2~1.8 cmである。

甘肅省礼県大堡子山Ⅲ1号墓には、馬車が副葬されているが、出土した青銅礼器は3個の鼎と甗が1個だけであった（早期秦文化聯合考古隊 2008）。この墓は、遊牧民の墓というよりは中原系である。弓弭と思われる骨器は長さ5.15 cm、幅1.8 cmで、2点1組である（図 35）。年代は春秋時代後期と考えられている。

黒龍江省平洋磚廠墓地からは、47点が発見された（黒龍江省文物考古研究所編 1990: 101, 図六三, 図版四八-6~10）（図 36）。採集品1点以外は、18基の墓から発掘されたものである。9点発見された墓もあり、3基からは6, 7点出土したが、1~3点出土した墓が多かったという。この墓地から出土した弓弭は、端部が方形のもの38点と円いもの9点に分類されている。男子が2体埋葬された101号墓の図を見ると、弓弭は被葬者の肩のあたりと膝近くの2か所から固まって出ているようである。また膝の付近には鏃が集中して出土している。あるいは肩から膝にかけて弓が置かれていたのかもしれない。そうだとすると、その長さは80 cm余りになるであろうか。ただ、弓弭の数からいうと弓は1張ではなかったことになるし、また肩の附近の弓弭の方向が逆のように見えるのが不審である。

黒龍江省平洋戦闘墓地では5点出土している（黒龍江省文物考古研究所編 1990: 150, 図八九-6, 図版五六-23, 24）（図 37）。磚廠墓地と同じ分類で、一端が円いもの4点、方形のもの1点である。211号墓では端部の

丸いもの2点が墓道において対称の位置で発見された。木製の弓本体は残っていなかったが、それに相応する位置にあったと記述されている。長さ19.9 cmである。しかしこれらは2点1組で使用される筈のものであり、1点ずつしか発見されなかったのは何故であろうか。

報告書では、磚廠墓地と戦闘墓地の年代は、春秋後期から戦国後期までにわたっていると考えられており、弓弭の出た墓は、戦国前期とされるものが多いようであるが、中期あるいは後期のものもある。

寧夏回族自治区固原県彭堡郷於家荘における発掘で、骨2点を接着した弓弭が4件（おそらく4組）出土している（寧夏文物考古研究所 1995: 101, 図一九-5）。M17号墓では被葬者の右足の近くから発見されており、現長10.3 cm、幅が1.7 cmという（図 38）。SM2号墓からは長14 cm、幅1.6 cmのものが発見されている。

なお同じく寧夏回族自治区固原県楊郷馬荘墓地でも、現長7.7 cmのものが採集されている（寧夏文物考古研究所、寧夏固原博物館 1993: 47, 図二七-15）（図 39）。

甘肅省張家川回族自治区馬家塬墓地では、戦国時代の遊牧民の王侯級の墓が発見されている。その12号墓から青銅製刀子に伴って骨製鞘が出土しているという（早期秦文化聯合考古隊、張家川回族自治区博物館 2009: 48-49, 図六四, 図七〇-7）（図 40）。しかしその形は骨製弓弭と同じであり、おそらく弓弭であろう。墓地の年代は、戦国時代後期と考えられている。

上に述べたのは大部分が中国北辺の遊牧民の墓であるが、戦国時代の諸国においても類似したものが発見されている。

戦国時代の燕国の都である下都の、武陽台村西北21号作坊遺址でも骨製の弓弭が発見されている（河北省文物研究所 1996: 上158頁, 図九四-3, 4, 6, 7, 下図版三五-3, 4）。一点は長さ16.4 cm（図 41-1）、もう一点は長さ6.8 cmである（図 41-2）。加えて、全体に筒状を呈し、側面に切込みのあるやはり骨製のものがある（図 41-3）。長さは4.2 cmである。これは側面観が今まで述べてきた弓弭と極めて似ており、弓弭として使用することが可能だと思われる。ここではもう一つ、切込みは顕著ではないが、外形の幾分似たものが出土している。

中国湖南省長沙五里牌の戦国墓（406号墓）で、弓の出土が報告されている（中国科学院考古研究所編著 1957: 59-60, 図版二七）。弓の本体は竹片を組み合わせ

て作られ、両端の弓弭は角製で長さは5 cm、弦をかけるための切込みがある(図42)。弓の長さは1.4 mであるが、弦の長さは80cmであり、弦を掛けた時には80cmに近い長さになるのであろう。比較的小型の弓といえる。報告にはっきりした記述はないが、写真によると弓弭は、やはり2点を組み合わせて一組にする型式のようである。それを弓の上下に取り付けたのであろう。

齊の国都のあった淄博市で、前漢時代の王墓の陪葬坑が発掘され、そこから2種類の弓弭が出土している(山東淄博博物館 1985: )。3号坑の西部分で、弓がまとまって出土した場所から発見された。一種類は青銅製で、木製の弓の両端に被せられていた(図43-1)。弓に固定する釘のための小さな穴があり、縦条紋で飾られる。弦を掛ける凹みがある。その一点は長さ4.3cm、幅が2.4cmである。もう一種類は弓の両端に取り付けられた骨製のもので、やはり弦のための切込みがある(図43-2)。その1点は長さ5.3cm、幅1.7cm、厚さ0.5cmである。

弓端に被せる青銅製の弓弭の例は珍しいが、これは「距末」(陳松長 2002) が着装状態で出土した貴重な資料といえよう。骨製の弓弭が1点で用いられたか、あるいは北方でのように2点を一組にして用いられたかについては、報告に記述がない。しかし0.5cmの厚みからは、やはり2点一組だったと思われる。この前漢時代の齊王は、前179年に卒した哀王襄と考えられている。

#### 4. まとめ

今までに紹介した結果をまとめると、おおよそ以下のようになるであろう。

今のところ、ユーラシア草原地帯における最も早い複合弓の例は、モンゴル・ザバイカリエの鹿石に表わされた弓の図である。その形はスキタイなどの弓と似ており、また腰から下げた弓袋に入れている様子からも、スキタイの使用したような小型弓であることが窺われる。骨あるいは角製の弓弭などが使われていたかどうかは分からない。しかし鹿石と初期遊牧民文化との関係性を考えた場合、このような弓がスキタイの弓の源流となったということは、かなり蓋然性の高い推測といえよう。なおハザノフは、スキタイの弓の起源に関連して、北カザフスタンの青銅器時代集落址アレクセエフスコエ発見の弓弭について述べている。たしかに発掘報告では弓弭と考えているが、ピットからの出土品であり、確実に弓に伴ったものではない(Krivtsova-Grakova 1948: 84)。今のと

ころ孤立した例でもあり、弓弭であったかどうかは疑問であろう。

スキタイの弓には、チェルネンコによると骨製弓弭などの部分品が付けられていたという。鳥頭形の骨製品も弓弭と考えられているが、それにはさらに確実な証拠がほしいところである。

スキタイの弓と同じシグマ形の弓はサウロマタイの領域や、ウラル地方、またミヌシンスク地方でも使用された。弓袋やゴリュトスに入れて帯に下げて携帯された様子も、ミニアチュアや骨製彫刻などの図像資料から知ることができる。アルタイの弓は西方のものに比べて、少し大型であり、1 m前後が多いようである。骨・角製の部品が使われないものもあるが、ヴェルフカルジンなどでは角製の弓弭が発見されている。

ザバイカリエやモンゴルでは、鹿石の時期の後に、板石墓文化が広まる。この文化における弓弭は、切込みのある骨・角製の2枚を合わせた形で、弓の両端に付けられる。スキタイや、ヴェルフカルジンなどで発見された弓弭は、突起部分に弦を掛ける仕組みであるが、ここで使用された弓弭は、切込みに掛けるものである。草原地帯の東西で、弓弭の型式が異なっていたことが分かる。鹿石の時期の東方の弓弭がどのようなものであったか、知りたいところである。ツェパンの弓は1.2mの長さであるが、オラーン・オーシグの例では、1m以下であった。

板石墓文化と同じ形の弓弭は、中国北部の広い地域に見出される。北京の軍都山玉皇廟で出土した例は春秋中期から後期にかけてのものと考えられている。これと同じか、幾分遅れると考えられているのが、河北白廟、河北懷来北辛堡、内モンゴル西溝子、内モンゴル涼城崞峯窯子、呼和浩特市新店子、包頭西園、そして甘粛の蛤蟆墩などで出土したものであるが、精確な前後関係はこれからの研究に俟ちたい。その後に来るのが、黒龍江の平洋や、寧夏の於家荘、馬荘などの出土品であり、それから戦国時代後期と考えられる甘粛の馬家塬発見の弓弭などであろう。板石墓文化と同型式の弓が、春秋時代後半から戦国時代におよぶ中国北方の初期遊牧民文化全体に広まっていたことが窺われる。河北省白廟墓地の場合は長さが1 mほどであった。

上に述べた板石墓文化や中国北方の墓で発見された弓弭は、明らかに後の匈奴の弓の弓弭と同種のものである。しかし匈奴の弓には弓弭のほか、中央部などに骨製の部品が使われるが、詳細の不明な白廟墓地の例を除くと、



それらの部品は上述の墓から出土例が報告されていない。板石墓文化や春秋・戦国時代の中国北方の初期遊牧民文化の弓では、骨・角製の部品は弓弭だけであったように思われる。それが発展して、中央部などにも骨・角製部品を配置し、長さが 150cm に達するまで大型になったのが、いわゆる匈奴-フンの弓であると考えられよう。そしてその系統の弓が、西方へも普及したのである。ほぼハザノフの考えの通りであるが、東方の状況が次第に明らかになってきた。匈奴-フン式弓の成立過程の詳細な解明は今後の課題である。

もう一つの解明を要する問題は、長沙出土の戦国時代の弓弭についてである。これは中国北方で発見される弓弭とほぼ同種のものであるが、中国北方との影響関係はどう考えるべきであろうか。長沙出土の弓弭は長さが短く、切込みの一端が突出した形を示している。この形は、内田の指摘するように、陳松長の紹介した湖南常德出土の「距末」や（陳松長 2002）、河南新蔡葛陵楚墓出土の弓弭（河南省文物考古研究所 2003: 127, 図七五-19, 20, 彩版二二, 図版四五-6）などの側面形と近く、内田はこのような弓弭が前漢時代の長安未央宮出土の骨箴に影響を与えたと考えている（内田 2009）。それは正しいであろう。ただ、燕下都出土の筒形の品や（図 41-3）、小型の骨製弓弭も（図 41-2）、似た形であることを考えると、その影響は楚国からと限定する必要はまだないのではないだろうか。

戦国時代には、北方の骨製弓弭が、すでに中国にかなり影響を及ぼしており、このような定型化された形をもつ弓弭が中国で一つの伝統を形成したと考えられる。そして中国独得の筒形の弓弭も、その形をとって作られたのであろう。

### 参考文献

于志勇

「漢長安城未央宮遺址出土骨箴之名物考」『考古与文物』2007 年 2 期, 48-62 頁

内田宏美

「漢長安城未央宮出土の骨箴に関する一考察」『日本中国考古学会 2009 年度大会 プログラム・発表要旨集』2009 年 11 月 21・22 日

河南省文物考古研究所編著

『新蔡葛陵楚墓』大象出版社, 2003

河北省文化局文物工作队

「河北懷来北辛堡戦国墓」『考古』1966 年 5 期, 231-242 頁, 図版 1-4

河北省文物研究所

『燕下都』上下 文物出版社、北京、1996

甘肅省文物考古研究所

「永昌三角城与蛤蟆墩沙井文化遺存」『考古学報』1990 年 2 期, 205-237 頁, 図版 5-10

吉林大学辺境考古中心、内蒙古文物考古研究所

「2002 年内蒙古林西県井溝子遺址西区墓葬発掘紀要」『考古与文物』2004 年 1 期, 6-19 頁

黒龍江省文物考古研究所編

『平洋墓葬』文物出版社, 1990

山東淄博博物館

「西漢齊王墓随葬器物坑」『考古学報』1985 年 2 期, 223-266 頁, 図版 13-20

早期秦文化聯合考古隊

「2006 年甘肅礼県大堡子山東周墓葬発掘簡報」『文物』2008 年 11 期, 30-49 頁

早期秦文化聯合考古隊、張家川回族自治県博物館

「張家川馬家塬戦国墓地 2007 ~ 2008 年発掘簡報」『文物』2009 年 10 期, 25-51 頁

高浜 秀

「カマン・カレホユック出土の鳥頭紋骨製品」『アナトリア考古学研究』Vol. VIII, (財) 中近東文化センター, 1999, pp. 175-177.

中国科学院考古研究所編著

『長沙発掘報告』科学出版社、1957

中国社会科学院考古研究所東北工作队

「内モンゴウ寧城県南山根 102 号石槨墓」『考古』1981 年 4 期, 304-308 頁, 図版 7

陳松長

「湖南常德新出土銅距末銘文小考」『文物』2002 年 10 期, 76-79 頁

内蒙古文物考古研究所

「涼城崞県窯子墓地」『考古学報』1989 年 1 期, 57-81 頁, 図版 9-16

内蒙古文物考古研究所

「内モンゴウ和林格爾県新店子墓地発掘簡報」『考古』2009 年 3 期, 3-14 頁, 図版 1-4

内蒙古文物考古研究所, 包頭市文物管理处

「包頭西園春秋墓地」『内蒙古文物考古』1991 年 1 期, 13-24 頁, 図版 1

寧夏文物考古研究所

「寧夏彭堡於家莊墓地」『考古学報』1995年1期,  
79-107頁, 図版13-18

寧夏文物考古研究所、寧夏固原博物館

「寧夏固原楊郎青銅文化墓地」『考古学報』1993年1期,  
13-56頁, 図版1-6

北京市文物研究所

『軍都山墓地—玉皇廟』文物出版社、2007

楊建華

「東周時期北方系青銅文化墓葬習俗比較」『边疆考古研究』第1輯, 2002年, 156-169頁

Chernenko, E. V. E. B. Черненко

*Скифские лучники*. Наукова думка. 1981.

Devlet, M. A. М. А. Дэвлет

Бронзовые бляшки в форме сложного лука из Хакассии.  
*Краткие сообщения Института археологии* 107(1966),  
с.70-74.

Dashibalov, B. B. Б . Б . Дашибалов

Плиточные могилы острова Ольхон. В кн.: *Культуры  
и памятники бронзового и раннего железного веков  
Забайкалья и Монголии*. Улан-Удэ, 1995, с.79-83.

Erdenebaatar, D. Д . Эрдэнэбаатар

*Монгол нутгийн дөрвөлжин булш, хиргсүүрийн соёл*.  
2002. Улаанбаатар.

Burial materials related to the history of the Bronze Age in  
the territory of Mongolia. in: *Metallurgy in Ancient Eastern  
Eurasia from the Urals to the Yellow River*. ed. by K. M.  
Liduff, 2004, pp.189-222.

Khazanov, A. M. А. М. Хазанов

Сложные луки Евразийские степей и Ирана в скифо-  
сарматскую эпоху. В кн.: *Материальная культура  
народов Средней Азии и Казахстана*. с.29-44. Наука,  
М., 1966.

Konovalov, P. B. П. Б. Коновалов

*Хунну в Забайкалье*. Брятское книжное издательство,  
Улан-Удэ. 1976. Табл. III

Krivtsova-Grakova, O. A. О. А. Кривцова-Гракова

Алексеевское поселение и могильник. *Труды  
Государственного Исторического музея*. Вып. X  
VII, 1948.

Kubarev, V. D. В. Д. Кубарев

*Курганы Уландрыка*. Новосибирск, 1987.

*Курганы Юстыда*. Новосибирск, 1991.

*Курганы Сайлюгема*. Новосибирск, 1992.

The Metropolitan Museum of Art, Yale University Press

*The Golden Deer of Eurasia: Scythian and Sarmatian Treasures from the Russian Steppes*. 2000.

Moshkova, M. G. (ed.) М. Г. Мошкова(ред.)

*Степная полоса Азиатской части СССР в скифо-  
сарматское время*, 1992.

Novgorodova, E. A., V. V. Volkov, S. N. Korenevskij und N. N.

Mamonova

*Ulangom: Ein skythenzeitliches Graberfeld in der  
Mongolei*. (Asiatische Forschungen Band 76) Wiesbaden,  
1982.

Okladnikov, A. P. А. П. Окладников

Погребение бронзового века в Ангарском тайге.  
*Краткие сообщения о докладах и полевых  
исследованиях Института истории материальной  
культуры Академии наук СССР*. VIII (1940) с.106-112.

Polos'mak, N. V. Н. В. Полосьмак

*Бараба в эпоху раннего железа*. Новосибирск, 1987.

*Всадники Укока*. ИНФОЛИО-пресс. 2001. Рис.119.

Smirnov, K. F. К. Ф. Смирнов

*Савроматы*. 1964, Москва.

Takahama Shu, Hayashi Toshio, Kawamata Masanori,

Matsubara Ryuji, D.Erdenebaatar

Preliminary Report of the Archaeological Investigations in  
Ulaan Uushig I (Uushigiin Ovor) in Mongolia. 『金沢大学  
考古学紀要』第28号(2006), pp.61-102.

Tsybiktarov, A. D. А. Д. Цыбиктаров

*Культура плиточных могил Монголии и Забайкалья*.  
Улан-Удэ. 1998.

Volkov, V. B. Волков

*Оленные камни Монголии*. Научный мир,  
М., 2002.



図1. クリ・オバ古墳出土の壺に表わされたスキタイ



図2. フン族の弓

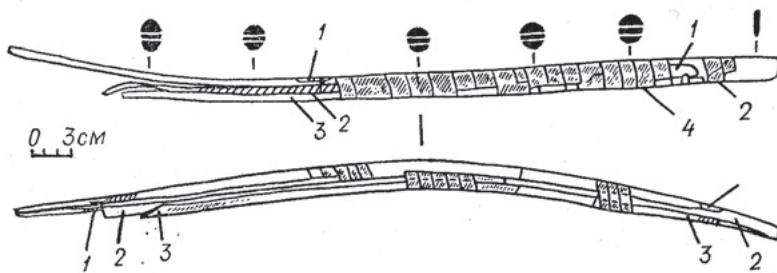


図3. トリ・プラタ古墳出土弓

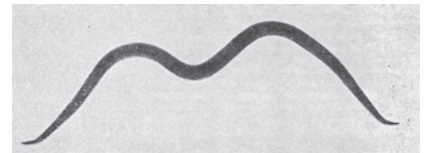


図4. オルビア出土弓模型

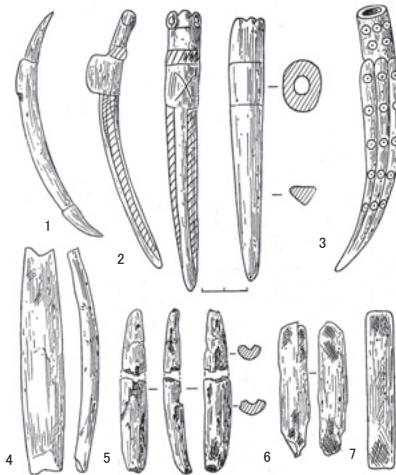


図5. スキタイの弓の骨・角製部品

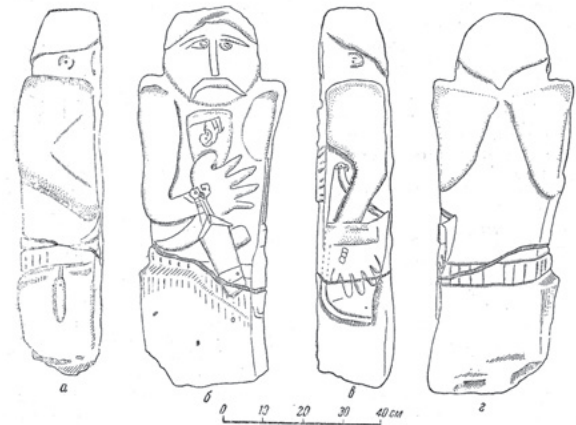


図6. テルノフカ出土の石人とその部分

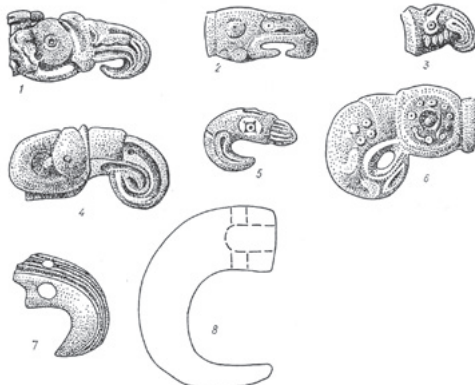


図7. 鳥頭形骨・角製品

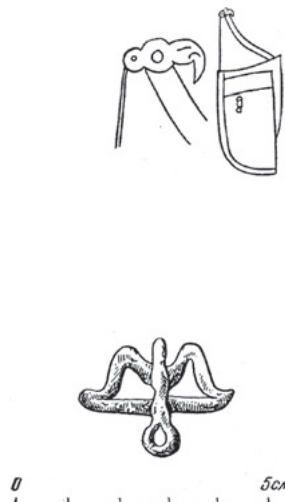


図8. 弓形装飾品



図9. フィリポフカ古墳出土骨製騎馬人物像



図 10. ピョートル大帝シベリア・コレクションの騎士形装飾



図 11. バジリク 5 号墳出土壁掛け

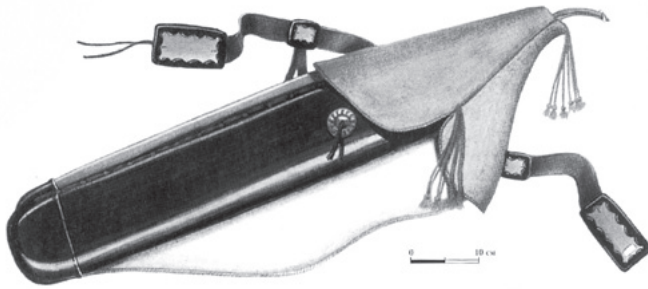


図 12. ヴェルフカルジン出土弓袋の復元



図 13. ヴェルフカルジン出土弓弭（左木製、右角製）

図 14. ヴェンゲロヴォ 7 号墓地出土弓弭

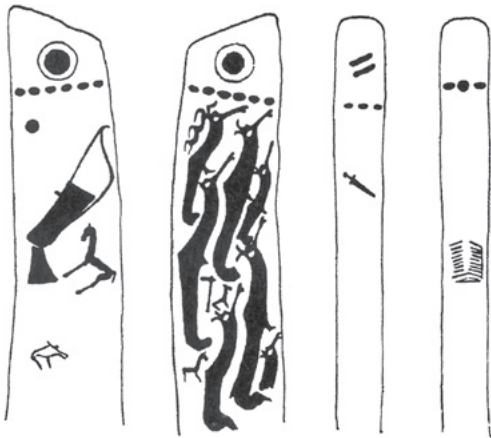


図 17. モンゴルの鹿石

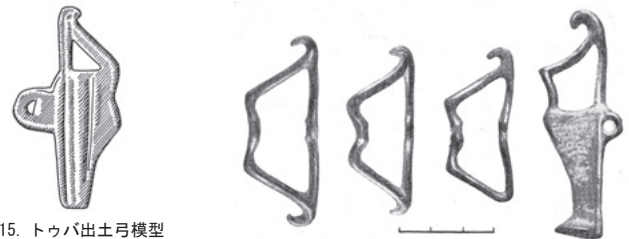


図 15. トゥバ出土弓模型

図 16. ミヌシンスク出土弓模型



図 18. モンゴルの鹿石

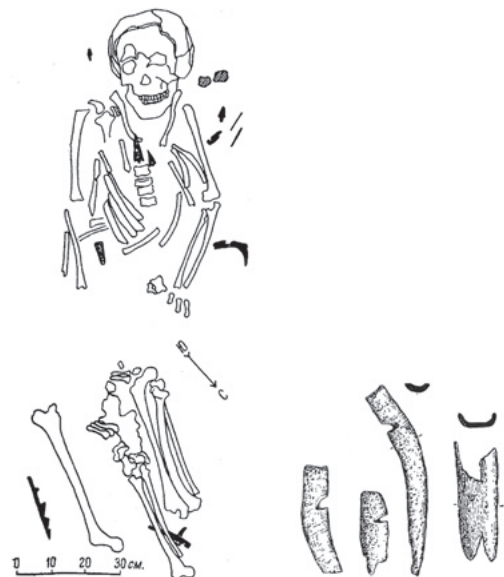


図 19. ツェパン発見の墓葬と出土した弓弭

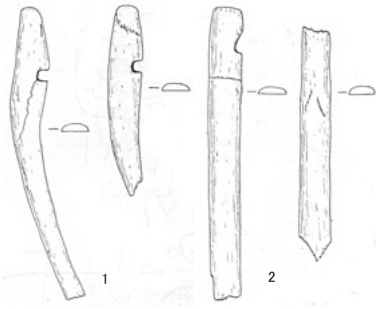


図 20. オルホン島発見の弓頭

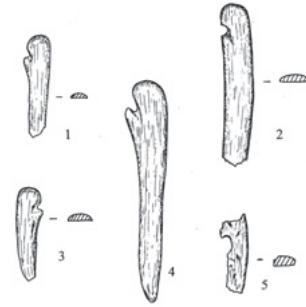


図 21. ザバイカリエの弓頭



図 22. ドンドゴビ発見の鏡

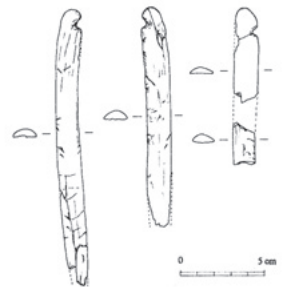
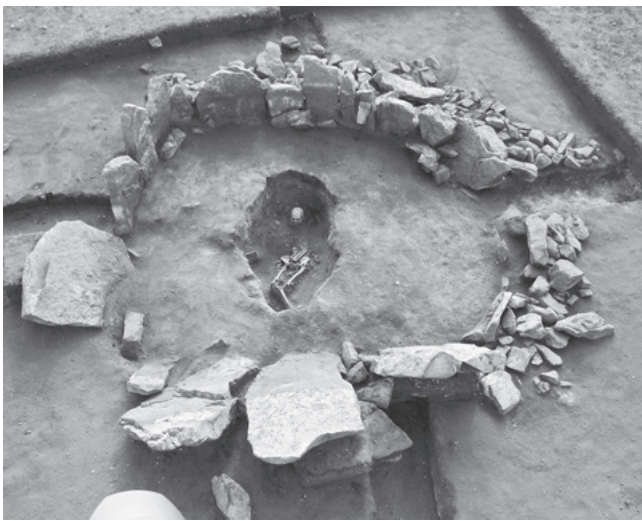


図 23. オラン・オーシグ I 第 1 号板石墓と出土した弓頭

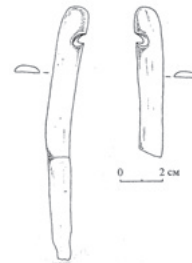


図 24. モンゴル歴史研究所所蔵弓頭



図 25. ドンドゴビ発見の弓頭

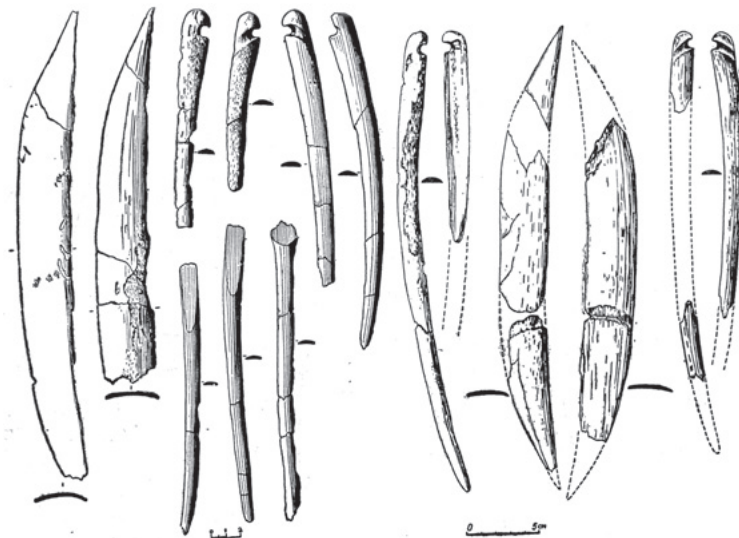


図 26. ザバイカリエの匈奴墓地出土の骨製弓部品



図 27. 南山根 102 号墓出土の骨製板とその部分図

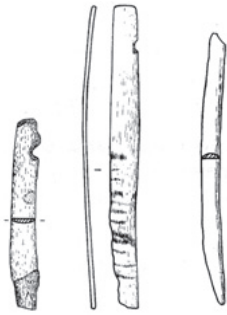


図 28. 玉皇廟出土弓弭

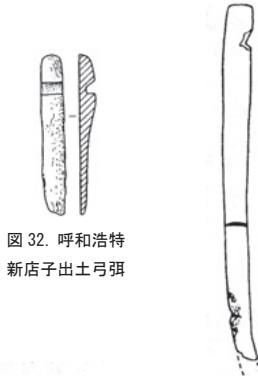


図 32. 呼和浩特  
新店子出土弓弭

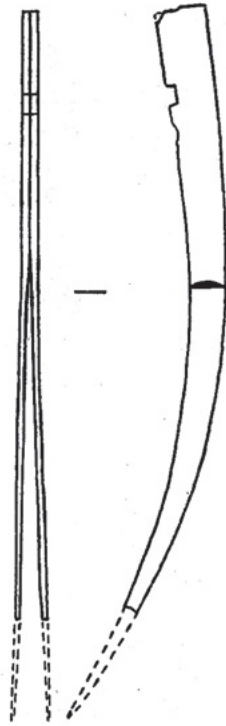


図 29. 懷來北辛堡出土弓弭



図 30. 林西西溝子出土弓弭

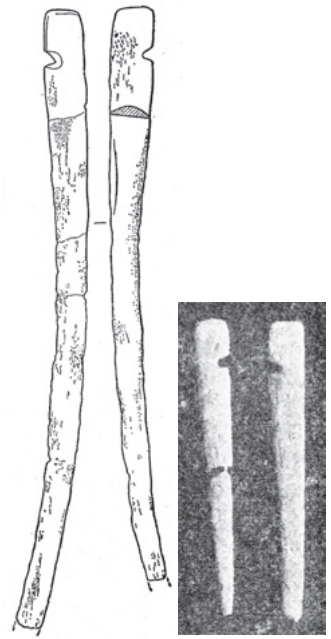


図 31. 涼城嶺縣窯子出土弓弭

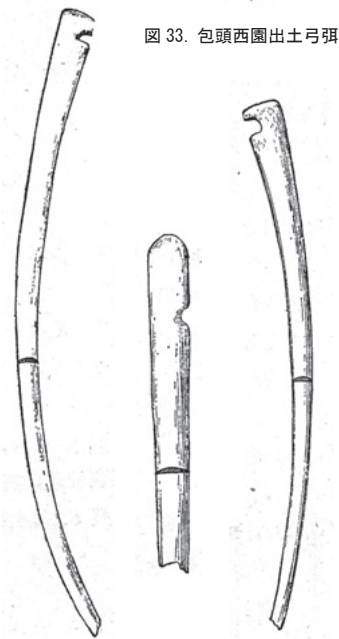


図 33. 包頭西園出土弓弭

図 29. 懷來北辛堡出土弓弭

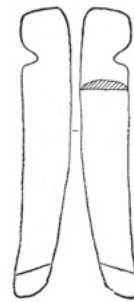


図 34. 金昌蛤蟆墩出土弓弭



図 35. 礼泉大堡子山出土弓弭

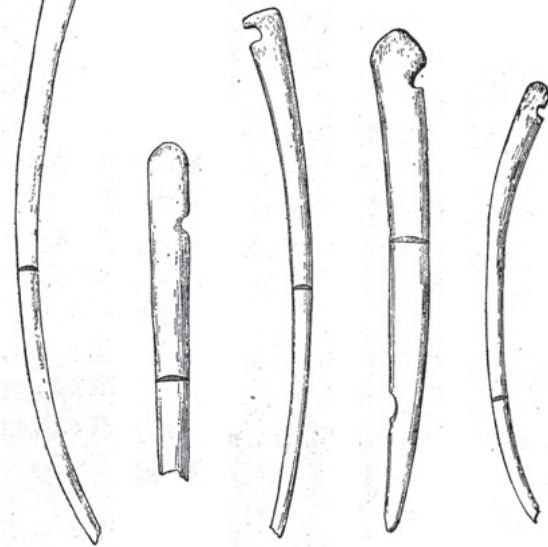


図 36. 平陽磚廠出土弓弭



図 37. 平陽戰閭出土弓弭



図 38. 彭堡於家莊出土弓弭



図 39. 楊郎馬莊出土弓弭



図 40. 張家川馬家塬出土弓弭

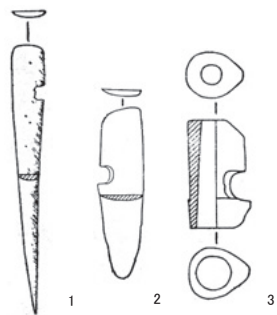


図 41. 燕下都出土弓弭



図 42. 長沙出土弓弭

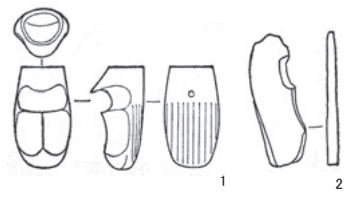


図 43. 前漢齊王墓隨葬坑出土弓弭